



JIC インフォメーション

第 183 号 2015 年 4 月 10 日

年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジエーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



旅行・留学のお問い合わせはいつでもお気軽にJICへどうぞ!
<http://www.jic-web.co.jp>

— 春のサンクト・ペテルブルグ、ピョートル大帝夏の宮殿(ペテルゴフ) —

《特集》 J I C ロシアセミナー

あえてロシア文学の素晴らしさを語る

～プーシキンからシーシキンまで、魂の温もりを求めて

沼野充義 (東京大学大学院・文学部教授)・・・2P

参考; ロシア文学 (『カトリック大事典』より)・・・10P

ロシア語劇団コンチェルトの活動・・・・・・・・・・13P

ウラジオ経済大学でのロシア語研修・・・・・・・・・・14P

イベント; ロシア文化フェスティバル 2015・・・・15P

国立モスクワ音楽劇場バレエ

日露修好 160 周年記念展、など

JIC では、J クラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

JICロシアセミナー報告

今あえてロシア文学の素晴らしさを語る

プーシキンからシーシキンまで、魂の温もりを求めて

沼野 充義

(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授)

今日は、ロシア文学の素晴らしさについて語りたいと思います。「あえて語る」とタイトルにつけたのは、ロシア文学はもちろん素晴らしいものなので、別に「あえて」と言う必要はないのですが、今日の社会情勢・政治情勢の中で、ロシアのイメージは残念ながらまた非常に悪くなっています。怖い国であるとか、危ない国であるとか、ロシアを知らない人はそう思いがちです。そうすると、ロシア文学も非常に被害をこうむってしまっていて、ロシア文学まで悪いものじゃないかと思われるかもしれません。もしも大変困る(笑)。もちろん、どんな国にも悪いところがあれば良いところもあります。私も日本を愛することにかけては人後に落ちるものではありませんが、日本にも悪いところはたくさんあります。ロシアも同じです。ロシアは素晴らしいところは本当に素晴らしいのですが、ひどいところ、恐ろしいところもあります。

しかし、今日は、これからロシアに留学に行こうとか、旅行に行こうと思っている人が集まっているわけですから、ここでわざわざロシアの悪いところを話しても仕方がない。今日はやっぱり、ロシア文学というのは、世界の文学の中でも本当に素晴らしいものだということを、あえてお話ししたいということでやってきました。

ロシア文学の歴史は、日本文学や英文学に比べると、それほど長くないのですが、19 世紀初頭から現代まで、素晴らしい作家が次々と出ており、そのすべてについて満遍なく語ることはできません。ジャンルを見ても、詩もあれば小説もあるし演劇もある。優れた文学者が、それぞれの分野で出ています。ということで、今日は非常にざっくりと、いくつかの切り口に分けて、「ロシア文学とはこういうものなんだ」ということを、お話ししたいと思います。19 世紀初頭の詩人プーシキンから現代に生きている作家シーシキンまで、7 人の作家や詩人を例にとってお話しします。

そういう切り口でやりますので、ロシア文学の流れとか歴史とか全体的な特徴とかはあまり詳しくお話しできません。そこで、補足資料を持ってきました。これは『カトリック大事典』という、上智大学が中心になって編纂した百科事典の「ロシア文学」という項目で、私が書いたものです。ここで大づかみに、日本におけるロシア文学、ロシア文学の前提条件、言



語と民族、宗教、政治社会との関わりといった概観的な説明をしていますので、参照してください(資料は講演録のあとに掲載)。

近代日本文学の形成に大きな影響を与えたロシア文学

ロシア文学はロシア語で書かれている。当たり前の話ですが、だからロシア語の原文で読まないことには本当には分からないということになるかもしれません。しかし、われわれがたとえば日本語とかロシア語とかいう場合、それがあたかも最初から無前提に存在しているかのように考えがちですが、実はそんなことはないわけです。ある国の文学言語というのは長い歴史の中で、作家たち、詩人たち、いろいろな人たちの実践の中で磨かれ、築かれて、これがロシア語だ、これが日本語だというのができてきたわけです。日本語は、7 世紀・8 世紀の古事記、日本書紀に始まって、万葉集、源氏物語などの文学的な作品が知られているわけですが、現代の日本語は、明治時代以降に形が決まってきたものです。明治の日本はたいへんな混乱状態で、人々が西洋にならって近代小説というものを書こうと思った時に、一体どんな文体で書いたらいいかわからなかったわけですね。江戸時代の西鶴(浮世草子)とか、近世の戯作読本とか、物語は非常に高いレベルで発達していましたが、その文体で近代小説を書くわけにはいかなかった。

そこで、日本では近代日本語を確立するための苦闘が 19 世紀後半から続いてきました。その初期に非常に大きな

役割を果たしたのが、二葉亭四迷という作家です。『浮雲』という作品が有名です。ちょっと寄り道していますが、なぜこの話をするかというと、二葉亭四迷はロシア語の達人でした。ロシア語が非常によく出来た。東京外国語大学の前身にあたる外国語学校でロシア語を専攻したのですが、こういう言い方はよくないですが、今の学生よりよっぽど出来た。なぜかというと、教育制度が全然違って、当時の日本はロシアや西洋のものをどんどん取り入れなきゃいけないということで一生懸命勉強したわけですが、ロシア語科であれば、大学の授業も、いわゆる一般教養科目も、ロシア人の先生がロシア語の教科書を使ってロシア語で教えていたわけです。だから、ロシア語とかロシア文学だけではなく、政治とか社会とか地理といった科目も、ロシア語が聞き取れなければ、授業が理解できない。日本にいながら外国に留学したような環境であったと言えます。その中で二葉亭四迷というのは、ロシア語の意味だけではなく、文学作品の音調とか、その美しさまで理解できるほどのロシア語の達人だったわけです。それでロシアのすばらしい文学作品を読んで、なんとかこれを日本語に移したいと思ったわけですが、江戸時代の戯作調の文体ではとてもそれが伝えられない。近代的なリアリズム小説、例えば自然描写とか心理描写の非常に微細でリアルな内容、それまでの日本文学にない書き方、これをどうやって日本語にするかというところで、二葉亭の近代日本語をつくる努力が始まったわけです。彼はツルゲーネフの作品を訳しました。『あひどき』という作品が特に有名ですが、それがいわば日本の近代文学の文体になる。近代日本語の文体の基礎を二葉亭は作ったということになります。ですから、日本の近代文学というのは、元々ロシア文学に非常に多くを負っているわけですね。これは別に恥ずかしいことでも何でもなくて、文学とか文化において、ある国が他の国の文化を吸収して豊かな文化を築くということは、そのこと自体が素晴らしいことだと思います。

1. ロシア文学は愛である

ロシアの国民詩人アレクサンドル・プーシキン (1799-1837)

ロシアでは 19 世紀初頭の詩人アレクサンドル・プーシキンが、いまでも最高の詩人と考えられています。「国民詩人」と呼ばれる存在です。一般に、ロシア文学というと、トルストイとかドストエフスキーとか小説家を思い描く人が多いと思いますが、ロシア人に「ロシアで最高の文学者はだれか」と聞いたら、多分プーシキンの名前が一番多く返ってくる。そのくらいロシア人にとって大きな存在です。

プーシキンは詩人です。日本ではロシアの小説は翻訳されて広く読まれているのですが、詩は翻訳してもなかなかその良さが味わいにくい。プーシキンは小説も書きましたが、彼の一番有名な作品は『エヴゲーニイ・オネーギン』とい

う長編で、これはチャイコフスキーのオペラにもなっています。長編小説のように見えるのですが、ロシア語では「詩で書かれた長編」という言い方をされていて、実は長編詩、詩の形をとっているものなんですね。ですからプーシキンの真骨頂というのはやっぱりロシア語で書かれた詩の美しさにまずあると言えると思います。しかし、その詩の美しさというのは、意味だけ取って訳すと、しばしば、なんでこれがいいのとかいようなものになってしまうわけですね。

プーシキンは小説も書いていて、彼の著作はロシアの歴史に取材した歴史小説から抒情詩まで、様々な分野に及びますが、やっぱりプーシキンのプーシキンらしさが出ているのは、恋愛抒情詩だと思います。恋愛抒情詩というのは、つまりある女性との思い出を美しく歌ったようなもので、下手くそに訳すと恥ずかしくて読めないものになってしまいます。真面目に意味を厳密にとって訳すと、なんでこれがいい詩なんだろうと、そのよさがなかなか伝わりにくい。ですが、今日は思い切って、プーシキンの有名な恋愛抒情詩『私はあの素晴らしい時を覚えている』という詩を、グリンカという作曲家が歌曲にしたものを聞いていただきます。原文は 20 行くらいの短い詩ですが、ガリーナ・ゴルチャコーワという歌手が歌っています。

『私はあの素晴らしい時を覚えている』というフレーズで始まる詩ですが、『かつてある女性に会った』、『その素晴らしい奇跡のような瞬間があった』、『その後、自分には険しい嵐の年月があつて、私はその素晴らしい面影を忘れてしまった』、『しかしまた私の心に覚醒が訪れて、再び君の姿が現れた』という内容です。

～歌～

この詩は、アンナ・ケルンという実在の女性に捧げられた詩です。プーシキンがまだ 20 代半ばだった 1825 年の作品です。ちなみにロシア文学の大作家、大詩人には、短命で早く亡くなった人が多く、プーシキンも 38 歳で亡くなりました。これは陰謀が関わっていると言われていますが、彼は決闘に巻き込まれて命を落としてしまった。そういう詩人です。

この詩は、ある女性に昔出会って、その清らかな思い出が焼き付いていた。あなたの美しさは『東の間の幻のように』、『純粋な美の化身のように』と、大変有名な言葉なのですが、そう歌っています。しかし、その後、詩人には荒々しい嵐の年月があつて、以前の夢は吹き飛ばされてしまった。私は幽閉の闇の中で、へき地で時を過ごした、と言う。プーシキンの実際の伝記に即している、彼は確かに女性の美を讃える抒情的な詩人なのですが、その一方で、当時の皇帝の専制体制を批判するような詩も書いていて、危険人物とも見なされていたのですね。実際、一時期、遠いへき地に流刑になってしまう。そういう苦難の時も味わっていたわけで、詩はそういった伝記的事実を反映しています。ですから、プーシキンは、こういう恋愛詩ばかり書いている軟弱な伊達男とい

うわけではなく、実は結構、皇帝に睨まれるような反逆的な自由思想も持っていた。しかし、この詩で言うと、最後に、もう忘れてしまっていたかつての夢がよみがえり、あなたが再び私の前に現れた。『私が失っていた神聖なもの、靈感、命、涙、そして愛が再び私によみがえった』と歌って、この詩は結ばれます。

詩の最後のフレーズは、「イ ジーズニ イ スリョーズィ イ リュボーフィ」(и жизнь и слёзы и любовь)という言葉の連続になっていて、最後は「リュボーフィ」、つまり「愛」で終わっている。ですから、ロシア文学というのは、いろいろな社会問題を扱ったり、皇帝権力に睨まれて幽閉されたり、非常に重い社会的問題と常に直面してきましたが、やっぱり最後は「愛」なんですね。これは本当に、恋愛叙情詩の一番良いところではないかと思います。

2. ロシア文学は青空である

文豪レフ・トルストイ (1828-1910) 『戦争と平和』

プーシキンから始めましたが、しかしロシア文学の本領はやっぱり小説だろうと思う人がもちろんいると思います。日本語に翻訳されて広く読まれ、日本の読者に強烈で巨大なインパクトを与え続けてきたという意味では、やはり、小説の話をしないわけにはいきません。19 世紀の優れたロシアの小説家は沢山いますが、何と言っても、トルストイとドストエフスキー。この二人の巨大な作家の作品は、いまでも広く読み続けられています。ヨーロッパのほかの国の文学、アメリカ文学、日本文学などと比べても、これほどの小説家はそうはいない。ロシアだけではなく、世界文学の中の二大巨峰といってもいいと思います。

この二人の巨大な作家について、簡単に話をするのは難しいのですが、トルストイには一番有名な作品が二つあります。ちょっとおかしな言い方ですが、二つの最も有名な長編があります。『戦争と平和』と『アンナ・カレーニナ』です。今日は『戦争と平和』についてお話しします。

「ロシア文学は青空である」と書きました。『戦争と平和』という作品を青空だと言ってしまったら、それはとんでもない簡略化ですけども、今日はいく一言、印象に残る言葉を言って、みなさんに覚えていていただきたいということで、敢えて『戦争と平和』は青空であるという話をします。

フランス革命の後ヨーロッパを席卷したナポレオンは、1812 年、ついにロシアに侵入します。これを迎え撃ったロシアは、最終的にはナポレオンを撃退して追い返すわけですが、これはロシア人にとって大変な戦争でした。ロシアでは「祖国戦争」という名前で今でも呼ばれています。このナポレオン戦争の時代を主題とした作品が『戦争と平和』です。「戦争」というのはわかりますが、では「平和」とは何か。この作品のタイトルはいろいろ象徴的に解釈できますが、ごく普

通に言えば、平和というのは、ロシア社会の中の貴族文化、豪華で煌びやかな生活、ロシアの平和な生活。これが「平和」であろうと思われる。これは本当に雄大な小説で、戦争の部分と平和の部分が交互に交代しながら、巨人の歩みのように、非常にゆったりとしたテンポで進んでいく。まだ読んでない方は是非、挑戦してください。長大な小説なので、この小説の時の流れに見合うくらいゆったりした気分を読んでいただきたいと思います。

これはソ連時代に、セルゲイ・ボンダルチュークという監督が、長編映画化しています。原作が長いので、映画も一本には収まりません。全三部の映画になっていますが、全部観ると 7 時間くらいかかります。ソ連社会主義時代のイデオロギー的な規制とか限界が随所に見られますが、しかしロシア文学の古典に忠実に当時の雰囲気再現しているので、大変興味深い映画になっています。その映画から、華やかな貴族の社交界の一場面をちょっとご覧にいきます。

～映像～

ヒロインのナターシャ・ロストワが舞踏会にデビューする場面です。大貴族だけでなく皇族も来るような絢爛豪華な舞踏会で、ナターシャがアンドレイ・ボルコンスキー公爵というハンサムな男性と出会うわけですね。ナターシャはなかなか誘われなくて、いわゆる「壁の花」状態です。そこにボルコンスキー公爵が手を差し伸べます。

『戦争と平和』のヒロイン、ナターシャ・ロストワは、ロシア文学の中でも最高のヒロインの一人です。この最高のヒロインを映画で誰が演ずるのかというのは大変な大問題でした。この可憐な美しい女優さんは、リュドミラ・サベリエワという女性で、映画撮影が始まったころはまだ 10 代半ばくらいでしたが、その後大女優になりました。

これは「平和」の部分ですが、こういう贅沢で貴族的な特権階級の生活。これに対しては、もちろん批判する思想や政治運動が出てきて、それが結局ロシア革命に行きつくわけですが、トルストイ自身は非常に質素な生活を自分で選択した。後には、こういう贅沢なものを完全に否定する立場に回ります。トルストイ自身は、貴族で裕福な家の出身だったので、こういう貴族的な世界も実際によく知っていたわけです。だからこのような作品が書けた。トルストイとほぼ同世代ですが、ドストエフスキーは庶民の出で、こういう世界とは縁がない人でしたから、彼にはこのような世界は書きたくて



も書けなかった。だから同じ時代でも、描かれるテーマも題材も違っているわけです。さらにもう一つ。トルストイは、クリミア戦争(1853-56)で、自ら前線に赴いて、実際の戦争を体験しています。これは他の多くの作家にはない経験です。

『戦争と平和』の中の「戦争」の部分はどうかという、これは史料を非常に詳しく調べて、ナポレオン戦争の実態を描き出していく。クトゥーゾフ将軍がナポレオン撃退の立役者になるのですが、彼は一種のロシア的な叡知の持ち主です。見た目には愚鈍で間抜けな感じで、居眠りばかりしているような人なのですが、実際には彼が中心になり、ロシア人一丸となってナポレオンを撃退するのです。

それで、先ほどの映像の中で、ナターシャにダンスを申し込んだアンドレイ・ボルコンスキー公爵ですが、彼は将校として戦争に参加する。彼はアウステルリッツの戦場で爆弾を受けて倒れ、死にかけるという場面があります。その時、彼は青空を見るんですね。そして、「なんで俺はこれまでこの青い空を見たことがなかったんだろう」「この青空は何だ」と、神の啓示のように青空の素晴らしさにうたれる。これは大変有名な場面で、実は日本では芥川龍之介が完全にこれを真似た小説を書いています、多くの作家に靈感を与えました。まさにトルストイは、現実世界、現実の戦争、あるいは貴族社会をリアルに描きながら、その表面を突き抜けるようなある啓示の瞬間、生活の表面を突き抜けた深い本質的なものを見せる。そういうしっかりしたヴィジョンの力を持っていた人だと思います。それがこの青空のシーンによく表れています。ですから、「ロシア文学は青空である」と、言ってみたかったわけです。

3. ロシア文学は子供である

予言者ドストエフスキー (1821-1881) 『カラマーゾフの兄弟』

次はもう一人の巨峰、ドストエフスキーです。ドストエフスキーとトルストイはロシア文学の二大巨峰としてよく並べられます。彼らは似ているというよりは、非常に対照的だという意味で並べられる。二人は全くタイプの違う作家なので、両方とも同じくらい好きだという人は、あまりいません。ロシア人に聞いても、どっちかが好きだという人が多い。

ドストエフスキーは、トルストイのように身分の高い貴族の出身ではありません。彼はずっと庶民的な生活を送りましたし、彼が描く世界もペテルブルクの街中の卑俗な世界が中心です。彼はいろいろなことで苦しみ悩む人々の姿を描きました。ドストエフスキーは、人間の苦悩を描いた作家だといえます。

中でも『カラマーゾフの兄弟』は、彼の五大長編の最後の作品で、一番の円熟期の作品であると同時に、規模も大きくて、『戦争と平和』よりは少し短いですが、相当長い作品です。この作品は、ロシアの、そしてドストエフスキーが人間の

生と死について重要と思っていたことが、本当にもうすべてぶちこまれているような、非常に重苦しい作品です。物語は、『カラマーゾフの兄弟』の父親、これは大変ふしだらで淫蕩を尽くした不道德な男なのですが、それがあの日殺されてしまう。殺したのは一体誰か、というところから話が始まって、父親と同じ女を争っていた長男のドミトリーが怪しいのではないかというふうに進んでいきます。一種の父親殺しとその謎解きをめぐる推理小説のようなところがあります。

特異なのは二男のイワンで、彼は無神論者です。「いったい、この世に神が存在するなんてことはあるのか」と疑問を投げかけます。「もしも神が存在しないとしたら、人間がそれを作り出す必要があった」「そうでなければ人間は生きていられない」「もし神が存在しないとしたら、全ては許されるのか」、といった問いかけが、この作品の中に強く響いてくるわけです。このイワン・カラマーゾフという特異な無神論者は、「合理的に突きつめて考えると神様はいないはずだ」というような、西欧の合理的な無神論とはかなり様相を異にしています。イワンは、「神が存在するというなら、俺はそれを認めてもいい」「しかしそれならば、なぜこんなひどいことが行われているのか」、「俺はそれを許すことが出来ない」と言う。

つまり、神を認めない、その存在を否定するというよりは、こんなにひどい世界を容認してしまっている神に対して反逆しているわけですね。これは西洋にはない、非常にロシア的な無神論のタイプだと思います。神の存在をめぐって、哲学的で深い重苦しい話をしているイワンですが、弟のアリョーシャ・カラマーゾフとの会話で、彼がもっとも気がかりな問題として取り上げるのは、子供の話なのです。この世で大人がひどいことをやっているけれど、それは置いておく。しかしなんで子供たちがこんなに苦しまなきゃいけないのか、と彼は言うわけです。当時のロシアでは、今の日本とおなじような幼児虐待や、子供をめぐる陰惨な事件が次々に起こっていて、新聞記事などでも頻繁に取りあげられていました。『カラマーゾフの兄弟』は非常に深遠重厚で難しい小説、深い底知れない淀みのような重苦しい小説と思われがちですが、そこで一番大事なものとして扱われているのは子供なのです。子供が何よりも一番大事なんだということをドストエフスキーは言ってるわけで、ですから、「ロシア文学は子供である」と、ここで言うておきます。

この小説は、非常に映像化は難しいのですが、実はロシアで映画化されています。最近日本でもテレビドラマになりましたが、ロシアからだいぶ日本に翻案した形になっていて、ちょっと違った雰囲気になっていました。ロシアで映像化されたものを見てみましょう。これはロシアのテレビで連続ドラマ化されて放映されたもので、イワン・カラマーゾフが子供の苦悩、苦難について、アリョーシャ・カラマーゾフに話をする場面です。

～映像～

ロシア文学によく見られますが、話が長くて、10 ページ分くらい延々と一人でしゃべるのも珍しくない。ここでイワン・カラマゾフは、この社会で子供がどんなふうに苦しめられているか、そのおぞましい実例をたくさん挙げています。ロシアのかなり大衆的なテレビ映画で、もちろん原作そのままではありませんが、台詞は概ね正確に再現されています。すごくロシア的だなと思うのは、このロシアの青二才であるイワンが語っている場所が居酒屋だということです。神はあるのか。神は認めるけれども、神の作ったこの世界は認められない。そういう話が延々と続く。酒を飲む、俗悪な酒場で、いわばその世界からとんでしまうような、深い形而上的な、あるいは宗教的な議論が延々と続く。この巨大な振幅。これはロシア文学、特にドストエフスキーの大変な力がよく出ている場面です。こういうものにはついていけないと辟易する読者もいるので、これはもうその人の好みと言うしかありませんが、我々は平穏な日本に暮らしていて、あまりにもこういう問題を考えなさすぎなのではないか。ドストエフスキーの世界に入ると、本当に何か、頭をガンと殴られるような衝撃を受けますね。これがドストエフスキーの世界です。しかしその要は、私はあえて子供だと言っておきたい。『カラマゾフの兄弟』で有名なのは、実はこの会話の後に出てくる「大審問官の伝説」という話です。「大審問官の伝説」に関する哲学的な分析は山のように書かれています。しかし、実はそれ以上に、なぜ子供が苦しまなければならないのかというイワンの問いが、『カラマゾフの兄弟』の核心にあると思います。

4. ロシア文学は「かわいい！」

鬱蒼たる大木が茂る森のキノコ、チャーホフ (1860-1904) 「かわいい(女)」

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてロシアを代表する一番面白い作家はチャーホフだと思います。ロシア文学は 19 世紀半ばに奇跡的な黄金時代、長編小説の時代を迎えます。1850 年代から 1880 年代までの約 30 年間に、トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフ、ゴンチャロフ、シCHEDリンといった作家たちが、いずれも歴史に残る長編小説を次々と世に送り出しました。これは世界文学史の中でも稀に見る大収穫期です。その時期に長編小説の可能性がもう尽くされたとは言いませんが、かなりの程度まで試されてしまった。その後に来る世代は、トルストイやドストエフスキーに対抗して長編小説を書こうと思ってももう無理である。そのような歴史的位になってしまいました。そういった中でチャーホフは、少し違うアプローチをしました。チャーホフはお爺さんが農奴でした。下層から上に上がってきた庶民の出の人なので、トルストイなどとは全く違う、ロシアの当時の社会変動を反映している人物です。彼は若いころモスクワ大学の医学部で医者になる勉強をしていたのですが、地方都市の

雑貨商人だった父親が経営に失敗して、一家そろってモスクワに逃げてきた。チャーホフの家族や兄弟は結構多くて、彼はそれを支えなければならない。まだ医学部に在学中で、原稿料を稼ぐためにユーモア小説誌にお笑い短編を書きまくって、それで家計を支えていた。そういうところから始まる人なんですね。だから、純文学的な何か深遠な芸術的表現とか思想とか、そういうものとは全く対極的なところから出発して、最初のうちは短編小説ばかり書いていました。その後、チャーホフは演劇にも非常な才能を発揮して、今では小説家としてよりはむしろ劇作家としてよく知られています。『かもめ』、『ワーニャ伯父さん』、『三人姉妹』、『桜の園』がチャーホフの四大戯曲です。チャーホフの演劇は、今でも世界中の劇団でレパートリーに入っていて、日本でも『かもめ』とか『桜の園』がたびたび上演されています。しかも、毎年新しい演出家が新しい演出を試みる。百年以上前の人なのに、演劇の面では未だに現代最先端のレパートリーであり続けている人ですが、小説の方で見ると、私は、チャーホフは「きのこ」だと思っています。「きのこ」とは何か。ドストエフスキーやトルストイは「巨木」です。大きな木がそびえる、巨大な鬱蒼たるロシア文学の森は 19 世紀半ばにできたわけですが、「巨木」といっても永遠ではない。倒れもするし、腐りもする。そして倒れて転がっていたら、人が通れなくなってしまう。その倒れて腐食した木を分解し、土に返してやる役割を果たすものが必要なわけですね。それがチャーホフではないかと思うわけです。だから「きのこ」なんです。「巨木」と「きのこ」とどっちが偉いかと言ったら、「巨木」の方が偉いに決まっていますけれども、では「きのこ」が不要な存在かということ、そんなことはない。チャーホフはロシア文学の「きのこ」であるというのは、私の知る限り私しか言ったことがないと思いますが(笑)、皆さん是非覚えて帰ってください。

では、チャーホフはどんな作品を書いたかと言うと、ドストエフスキーのように「神はあるか、ないか」と居酒屋でよくまあ、こんな議論をするなあと思わせるようなことを、もの凄い勢いで延々と議論をする、なんてことはしませんでしたし、トルストイのように絢爛豪華な貴族社会や戦争という壮大な歴史パノラマ、それも書かなかった。チャーホフは、もっと人間の面白さを観察するような、庶民的な世界を描いて、そこから、「きのこ」として、人間性というものを分解していく、そういう作業をしたと思います。ここではチャーホフの有名な短編の中から、『かわいい女』を紹介しておきます。

この作品は、歴代いろいろな方が翻訳していますが、『かわいい女』という邦題が普通ですね。じつはこのタイトルの「女」は「おんな」と読んではいけないのです。多くの翻訳では「女」という漢字に「ひと」とルビが振ってあって、「かわいいひと」と読めという指示が一応入っています。私は最近チャーホフの短編集の新訳を一冊出したのですが、そこではこの「女」を取ってしまって、「かわいい」という訳にしました。

「かわいい」というと最近の流行語みたいで、少し顰蹙を買う面もあったのですが、なぜそうしたかと言うと、「かわいい女」というと何か男の目線でちょっと色っぽい、いい女だな、みたいな感じがしてしまうのですが、チャーホフの『かわいい』という作品はそういうエロティックな女性の話ではないのですね。もっと、もっと単純な、馬鹿じゃないかと思えるけれども神聖かも知れない、そういう女性を描いているのです。「女」をつけると大きな誤解を招くので、「女」はとった方がいいと考えたわけです。今風の日本でいう、何か可愛い、愛らしくていいなと思うものに対して、人が「あっ、かわいい」っていうのに近いと思います。

この作品のヒロイン、オーレンカは、すごく気立ての良い、善良な、ほんとに可愛らしい女性なのですが、問題があると言えばある。誰かが好きでなければいけない。好きな人がいなければ生きて行けない、そういう女性です。それで彼女は、好きになって惚れ込んだ男ができるとすぐに結婚するのですが、男運が悪いというか、これはユーモア小説のパターンですが、その夫が次々と死んでしまう。好きになって結婚した男が軽演劇をやっている興業師だとすると、「この世で芝居ほど大事なものはありません。私は芝居を見ない人なんて、もう気が知れませんか」と、芝居がいかに良いものかということをも人に説き続ける。その夫が死んで、次に材木商の男が大好きになって結婚すると、今度は「この世で一番大事なのは材木だ」と言いたて、「芝居なんか見に行く暇ありませんわ。あんなものどこがいいんでしょう」とか言うわけです。ともかく自分の好きな男次第で、考えがくるくる変わってしまう。皮肉に言えば自分を全く持っていない女なのですが、では、果たしてチャーホフはこの「かわいい女」をバカにするために書いたのか、それとも素晴らしい人間と考えていたのか。チャーホフよりもずっと年長のトルストイは、この小説を読んで感激し、「これこそ人間の一番神聖なあり方である」と大絶賛したのですが、チャーホフはどうやらそういうふうには思っていなかったようです。どちらかというと、このように相手次第でくるくる考えが変わる主体性のない人間、受け売りで人の意見を自分が考えたことのように言いふらす人間を、結構皮肉に書いていると思います。しかし、ではそれが 100%ダメかというと、それもよく分からない。つまりチャーホフは、よく観察するときわめて面白い複雑な人間というものを——、もっともオーレンカはさほど複雑とは言えないかもしれませんが——、一つの典型として提示する訳です。人間観察の天才なわけです。その人がいい人か悪い人かということは、読者の皆さん、どうぞ自分で考えてください。このような姿勢でチャーホフはこの世界を見続けた。そういう人だと思えます。

トルストイやドストエフスキーは社会的問題、あるいは神が存在するか存在しないかというような思想的宗教的大問題に取り組んだ。作家は、これらの大問題をとことん追求して、

読者に人間の生き方を示さなければならないという姿勢で、人生そのものにコミットしていた作家ですが、チャーホフはちょっとそこから距離を置いて、人間というのはこういう不思議なものなんだということを描き出す。それでトルストイは、これを読み、自分なりの解釈をして、ある意味では超勘違いをして、「これは深遠な、素晴らしい、最高に神聖なものをチャーホフは描いたのだ」と、チャーホフに会った時に彼を前にして力説した。そうしたらチャーホフは体調も悪かったせい、困ってしまって、「トルストイは偉い人だけど、とてもトンチンカンな褒め方をしている。俺はそんなこと考えてなかったのになあ」と思ったのでしょう。しかし、違いますって反論もしにくい。要するにチャーホフの立場から言えば、そういうふうに読む人がいても、それはそれでいいかもしれない。チャーホフはボツンと言、「いやあ、あの小説には誤植がちょっとありまして」と言って、それでおしまいであったと、ゴリキーが伝えています。

5. ロシア文学は燃えない

ミハイル・ブルガーコフ(1891-1940)『巨匠とマルガリータ』

19 世紀後半から 1880 年頃までの大作家の時代のあとに、世紀末から 20 世紀にかけてチャーホフのような作家が出てきて、ある意味ではモダニズム、近代的なものへの橋渡的な存在になります。その後、1917 年にロシア革命がおこり、ソ連時代に入ります。

ロシアにおいては、伝統的に政治や社会と文学が密接な関わりを持ってきたとよく言われます。プーシキンのような美しい恋愛抒情詩を書いた詩人であっても、皇帝に迫害されて流刑の憂き目にあい、最後は今でも事情がよくわからないのですが、陰謀とも言われる決闘に巻き込まれて死んでしまう。そのような広い意味での政治との関わり合いの中で、作家たちは生きなければならなかったわけですが、社会主義時代になると、思想的、社会的、イデオロギー的な支配と圧力はより直接的で大きな問題になります。一般の人の中には、ソ連時代には言論が抑圧されて、表現の自由もなかったから、ろくな文学は育たなかったのではないかという人もたまにいます。しかし、「ロシア文学の逆説」とよく言われるのですが、社会的な状況が厳しければ厳しいほど、作家や芸術家は芸術的な感性を磨いて、抑圧に打ち勝つ新しい表現を作っていく。むしろ、社会がひどいから、抑圧されているからこそ、作家は素晴らしいものを生み出すんです。では、皆が幸せになって、抑圧もなかったら、文学は逆にダメになってしまうのか。一体どっちがいいんだろうね、という話は時折出てきますが、いずれにしても困難なソ連体制の中で、それだからこそ生まれてきた力の強い作家たちがいて、その人たちは今ではもう 20 世紀ロシア文学の古典として読まれています。

その代表的な作家として、ミハイル・ブルカーゴフの『巨匠とマルガリータ』という作品をここでは紹介しておきます。これはスターリン時代に書かれた小説で、ブルカーゴフはソ連でも大変有名な作家でしたが、後半生は当局との軋轢の中で非常に不遇な立場におかれ、最後はほぼ絶望的な状態の中で、亡命することもできず、病気で死んでしまいます。彼の場合、粛清で殺されたわけではないので、ある意味ではまだ良かったといえるかもしれません。そのブルカーゴフが発表のあてもなく、晩年書き続けていた小説が『巨匠とマルガリータ』です。これは 1920 年代のソ連を舞台にしていると思われる、風刺的な小説です。描かれている風俗はリアルなのですが、物語の展開は非常にファンタスティックで、深い思想的な思索にも満ちていると同時に、グロテスクで風刺的な笑いにも満ちた、カーニバル的なところもあり、読みだしたらやめられないほど面白い作品です。

物語では、モスクワにヴォラントと名乗る悪魔の一味がやってきます。悪魔にはその手下として、巨大な猫の化け物とか、怪しげな連中がついてくるのですが、それがモスクワを攪乱していく。他方、このモスクワには、巨匠と呼ばれる詩人が住んでいます。彼が書いた作品が宗教的色合いの強いものだということで、当局に非難され、絶望した彼は自分の原稿を暖炉で燃やしてしまう。ところが悪魔のヴォラントが、失われたと思われていた原稿を取り戻してくれるんです。巨匠の恋人であったマルガリータという女性が、悪魔と契約して、悪魔のために尽くす代わりに何か願を叶えてやろうと言われたとき、失踪した巨匠を私のもとに返してくださいと悪魔に頼むわけですね。そして、巨匠はマルガリータのもとに帰ってくるとともに、かれが焼き捨てたはずの原稿が甦るのです。そこで悪魔が言う言葉はたいへん有名です。
「原稿とは燃えないものだ」

これは悪魔の言葉ですが、ある意味では、作家ブルカーゴフの、そしてロシア文学に関わる人たちがすべての、信念であるかもしれない。非常に象徴的な言葉です。ロシア人はですね、書かれたものは神聖なものだと信じているところがあるんです。一旦書かれたものは、どんなに抑圧されて、たとえ当局に没収されたり、焼かれたりしても、燃えない。つまり、必ずどこかに残っていて甦る日が来るのだという考えを持っているのです。ブルカーゴフは、この『巨匠とマルガリータ』という作品を発表する当てもなく書いて、本当に完成させたかどうか実はよくわからないのですが、ほぼ小説は出来上がった状態になって、そのまま亡くなってしまいました。この作品は、1960 年代後半に発見されて、ソ連でまず解禁されますが、より完全な版は西側で出版されました。まさに死後四半世紀以上経ってから、作品はよみがえったわけです。20 世紀のロシア文学の再発見の中でも最大のニュースとして、これは当時あつという間に世界中に轟き、世界何十カ国語ですぐ翻訳されました。日本でもいくつかの翻訳がまし

たが、最近では池澤夏樹編の世界文学全集に水野忠夫さんの訳で入っていますので、ぜひ読んでいただきたいと思います。「原稿は燃えない」という言葉、これはロシア人の、ロシア文学の力に対する信念の言葉でもあると思います。

6. ロシア文学は一人で巨悪と戦う

途方もない作家ソルジェニーツィン (1918-2008)

反体制の超人的な闘いとゴキブリを見る優しいまなざし

駆け足ですが、もう少し時代を下って、つい最近まで存命であったアレクサンドル・ソルジェニーツィンに行きましょう。ソルジェニーツィンは、旧ソ連時代のソ連に生きた作家で、自分自身も収容所に入れられたことがあり、そのソ連の強制収容所の実態を、膨大な資料を集めて、ドキュメンタリー小説の形式で描き、『収容所群島』というタイトルで発表しました。これは当時のソ連では到底出せるものではなく、1973 年にパリで出版されます。彼はそれが直接の理由になって、強制国外退去を命じられ、これまた世界的な大ニュースになりました。

旧ソ連時代の国家機構という巨大な歯車に対して、ソルジェニーツィンは、ペン一本で、たった一人で立ち向かい、戦った。非常に超人的な存在でありました。やはりここでもロシア文学の持つ言葉の力というのは非常に大きかったと思います。作家一人のペンが繰り広げる文字というものの、それは国家がどんなにやっきになっても消すことができない。ソルジェニーツィンの作品はそれを雄弁に物語っています。

ソルジェニーツィンは強制国外退去になった後、20 年ほどアメリカで暮らして、ソ連崩壊後のロシアに戻ります。旧ソ連時代にはその名前を出しただけで逮捕される危険があるぐらいの超危険人物だったのですが、ソルジェニーツィンは今では大作家としてロシアで認められています。2006 年に彼は亡くなりましたが、今日のロシアでは、むしろ知的権威の一人になっていると言ってもよく、教科書にも彼の作品が取り入れられるようになっています。しかし、彼の場合、国家権力によって聖人のような存在として固定されるのは、作家としての彼にはあまり相応しくないんじゃないかと私は思います。やはり、権力と戦うことによって作家が本来の力を発揮するというのが、ロシア文学のプーシキン以来の素晴らしい伝統であったわけで、誰もがそれを真似できるわけではありませんが、ソルジェニーツィンはそれを一人でやってしまった超人的な人です。

ただし、こんな話をすると、ソルジェニーツィンは、政治とか、イデオロギーとか、そういう問題ばかり扱って、何か硬くてこわもての作家のように思われるかもしれませんが、文学的にも素晴らしい作家であることを知っておいていただきたいと思います。私はここで敢えて、ソルジェニーツィンの『マトリョーナの家』という作品を推薦しておきます。これは初期

の短編ですが、田舎に住んでいるマトリョーナという庶民の女性を描いています。マトリョーナは、善良な庶民ですが、完全に美化されてるわけでもなくて、愚かで善良で、民衆的な偏見をもっていたりもする、そういう人物です。しかし、こういう義人が一人でもなければ世の中は成り立たないんだということわざを引きながら、結局、世の中はこういう人によって持っているのだとソルジェニーツインは言うわけです。そういう個としての人間のあり方に対する非常に暖かい眼差しというものが、この作品にはありました。この田舎の生活で、ちょっと気持ち悪いのですが、ゴキブリがウヨウヨ出てくるシーンがあります。『マトリョーナの家』は農村の家で、壁紙の裏にびっしりとゴキブリがいて、ウヨウヨ動いていて、それがカサコソ音を立てて、大海のうねりのようであると描写される恐ろしいシーンです。日本の若い女性は考えただけで卒倒するかもしれませんが、ゴキブリに注ぐソルジェニーツインの眼差しも、ある意味では優しいところがあり、「これこそ自然なんだ！」「自然に悪意はない」、そういうロシアの民族派的な立場が、ゴキブリを見る目一つにも表れていると思います。

7. ロシア文学は光と温もりの塊だ

現代ロシア文学を代表する作家ミハイル・シーシキン (1961-) の素晴らしさ

最後に、今生きている現代の作家ですが、現代ロシア文学にはさまざまな面白い作家がいて、日本でもかなり翻訳が出ています。名前だけ挙げると、女性作家のウリツカヤ、歴史大衆推理小説で大人気のアクーニン。現代文学の先鋭的なところではペレーヴィン、ソローキンといった作家たちがいます。ちなみにアクーニンは元々日本文学の専門家で、三島由紀夫の翻訳などをやっていた人ですが、今や世界的に有名な売れっ子推理作家になりました。

今日ここでは、一人だけ、シーシキンという作家を紹介しようと思います。シーシキンは日本ではまだそれほど知られていないのですが、二年くらい前に『手紙』という小説が翻訳されて、出版されています(奈倉有里訳、新潮社)。現代ロシア文学では、ソローキンなどはあまりにも先鋭的ですが、それに比べるとシーシキンはもう少しオーソドックスで、ロシア文学の良き伝統を正統的に受け継いでいる。手法的にはそれほど単純ではなくて、かなり現代的な先鋭的な試みをやっているのですが、ロシア文学の本筋の一番良い所を受け継いでいる、そういう作家ではないかと思います。

『手紙』という小説はちょっと複雑な仕組みになっていて、二人の男女の手紙のやり取り、ほほえましいラブレターのやり取りから始まるのですが、実はこの二人の手紙のやり取りは、時間と空間を超えた現実的にはありえないやり取りではないかと思わせる方向に話が展開していきます。その仕掛けについては、ここではこれ以上お話しませんが、時が混

乱し崩壊した世界の中で、手紙だけが時空を超えて呼び交わしているような小説です。男性はヴァロージャ、女性はサーシャ。ヴァロージャとサーシャの二人の手紙のやり取りですが、二人は最後にどうなるんだろうかと読者に思わせながら小説が展開すると同時に、二人の言葉が温かく力強く心に直接働きかけるように作用してきます。小説の最後の方に、ヴァロージャが正体不明の「彼」と呼ばれる人物に誘われてどこかに出発しようとしている場面があります。そこでヴァロージャはこんなことを言います。

「人間は光と温もりの塊であり続けるだろう」

人間というのは、光と温もりの塊だ——素晴らしい言葉です。これはやっぱりロシア作家でなければ言えない言葉ではないかなと思いますね。

ということで、プーシキンからシーシキンまで、ほんの点描で、少しずつ 7 人の作家の話をしました。ある流れが見えてきたのではないかと思います。

今日ここにはシーシキン『手紙』の翻訳者である奈倉有里さんが来てくれているので、奈倉さんに何か一言コメントをもらいましょう。

奈倉: すごく恐れ多い流れの中で紹介されてしまいました。奈倉です。

今日は沼野先生の話聞いていて、ロシア文学の中のいろんなシーンがフラッシュバックして、楽しく聞いていました。今先生が引用された、人間はいつも光と温もりの塊なんだよというメッセージは、この本の最初と最後に書かれていて、作品を貫いているシーシキンの言葉なのですが、プーシキンにしても、トルストイにしても、ドストエフスキーにしても、やっぱり今日話に出てきたようなシーンの中で、そういう人間の温もりみたいなものを感じる、本を読んでいて本当に心が射抜かれるみたいに、そういうものを感じる瞬間というのがあって、それはロシア文学に限らず、すごく大切な瞬間なんだなと思います。あと、この本は言葉の響きということについて書かれた本でもあって、たとえば主人公のサーシャの手紙で、「私はあなたの妻、あなたは私の夫、それがこの世界で一番素敵に響き合う韻律なの」という言葉があって、ロシア語の夫と妻というのはムーシュとジェナーで、これは詩の解説で言えば韻律ではないんですね。韻律というのは、さっきのプーシキンの詩で言えば、ムグナヴェーニエ(мгновенье)とヴィジェーニエ(виденье)とか、そういうふうに音が響き合うことですが、そうではなくて、サーシャが言っているのは、内容の響き合い、自分がすごく大好きなヴァロージャと自分が響き合っている韻律であって欲しいというような気持ちであって、そういう内容の響き合いというのがたくさん詰まっている本です。

沼野: そうですね。今日の私のトークの副題も、「プーシキンからシーシキンへ」となっていて、これが音が響き合っているから韻を踏んでいると言えるのですが、何よりも内容が響き

合っているということを私も言いたかったんです。

今日はこのあとロシア留学の説明会もあると聞いています。私はロシア語もロシア文学も学校時代から含めれば 40 年くらいやっていますが、40 年もやっていて未だにロシア語が良く分からないし、文学も知らないことばかりです。そもそも我々の時代は、若いころ簡単には留学ができなかったんですね。私もだから長期でロシアに留学したことが無いまま日本で専門家になってしまい、むしろ大学の教師になってからいろいろな機会を利用してロシアには短期で何度も行っています。しかし、若いころ留学していないのはやっぱり大きなマイナスで、言葉を吸収できる若い時期に、生活の中でロシア語を聞くのはすごく大事なことだと思います。今発言していただいた奈倉有里さんは、東京大学の大学院に在籍中の若手研究者ですが、翻訳でも活躍し始めています。シーシキンの『手紙』は翻訳家としての奈倉さんの鮮やかなデビュー作です。奈倉さんは、実は大学は日本ではなくて、モスクワのゴーリキー文学大学という文学専門家を養成する有名な大学に学部的一年から入って卒業している。普通の日本人にはめったにない経験をしている人なのです。それ程長い間留学することは誰にでもできることではないわけで、そういう貴重な人材が日本のロシア文学界で今後おおいに活躍してくれることを期待しています。留学を希望している方は、こういう素晴らしい文学が書かれている言語が現場でどういうふうに使われているのか、是非自分の身で感じてきていただきたいと思います。

参考;ロシア文学

沼野充義 (『カトリック大事典』の記述より)

【日本におけるロシア文学】

ロシア文学は明治以降の日本において、ヨーロッパ諸国の文学の中でもとりわけ重要な地位を占め、多くの読者に愛読されてきた。二葉亭四迷(1864 - 1909)がイヴァン・ツルゲーネフ(Ivan Mrgenev,1818 - 83)の翻訳を通じて日本語の小説の文体を作り、明治時代、白樺派の作家たちがレフ・トルストイ(Lev Tolstoi,1828 - 1910)を愛読し、小林秀雄(1902 - 83)や埴谷雄高(1909 - 1997)がフョードル・ドストエフスキー(Fyodor Dostoevskii,1821 - 81)を熱心に論じた、といったことを考えても、ロシア文学が近代日本の作家たちに与えた影響が計り知れないほど大きいことはすぐにわかる。

しかし、ロシア文学は歴史や文化の背景が、英・独・仏などの西欧の文学の場合とかなり異なっているにもかかわらず、日本では必ずしもそういった背景の正確な理解がないまま、作品そのものの魅力に惹かれて愛読してきたという傾向が強い。さらに、ロシア文学はある特定のジャン

ルや時代ばかりがよく知られるという偏りが強く、なかなかその全体像が描きにくいという状態が続いてきた(ジャンルに関して言えば、日本ではロシア文学のうち小説が圧倒的によく知られている反面、詩は一般にはほとんど読まれていない。また時代について言えば、一般によく知られているのは 19 世紀から 20 世紀の文学だが、それ以前の時代についてはほとんど知られていないのが実情である)。

日本のロシア文学研究には明治以来長い歴史と深い蓄積があり、日本人のロシア文学者の手によって優れた文学史が何冊も書かれてきたが、その多くは作家とその作品を時代順に並べて解説するというオーソドックスな形式のものであり、百科事典におけるロシア文学の大項目も通常、年代順の文学史的記述を簡略にしたものになっている。本項では、日本におけるロシア文学紹介のこういった状況を踏まえ、通常の文学史的記述を避けながら、なるべくロシア文学の特質を全体的に把握することに重点を置く。

【ロシア文学の前提条件】

【ロシア文学の境界】ごく一般的な定義をするならば、ロシア文学とはロシアという国において、ロシア人によってロシア語で書かれた文学、ということになるはずだが、じつはそう単純には定義できない複雑な要因をロシア文学は抱えている。これまで書かれてきたロシア文学史の多くは、「ロシア文学」というものがある自明の枠組みの中に存在するかのような前提に基づいているが、実際にはロシア文学の境界、つまりどこからどこまでがロシア文学かということはそれほど自明ではなく、また歴史的に変動してきた。

普通、ロシア文学史においてロシア文学の起源として扱われるのはキエフ・ルーシ時代の中世文学だが、言うまでもなく、現在キエフはウクライナの首都であり、ロシアの一部ではない。ウクライナ人の立場からすれば、キエフ・ルーシの文学はウクライナ文学史の一部とも当然見なせるのである。

また 20 世紀、ロシア革命の後に多くの作家や知識人がソ連を逃れ、西側に亡命したため、20 世紀のロシア文学はソ連本国と亡命先の両極に分かれて存在するかのようになった。亡命の波は、ロシア革命後に革命を受け入れずに西欧に逃れ、主としてベルリンやパリで活動をした第 1 次亡命世代(ドミトリー・メレシコフスキー Dmitrii Merezhkovskii, 1866 - 1941)、イヴァン・ブーニン [Ivan Bunin,1870 - 1953]、ヴラジーミル・ナボコフ [Vladimir Nabokov,1899 - 1977] など)、第 2 次世界大戦終結の際、難民や捕虜として西側に逃れた第 2 次亡命世代、1970 年代から 80 年代に反体制派知識人として欧米に追放された第 3 次亡命世代(アレクサンドル・ソルジェニーツィン [Aleksandr Solzhenitsyn,1918 - 2008]、アンドレイ・シニャフスキー [Andrei Sinyavskii,1925 - 97]、ヴァシーリー・アクショノフ [Vasilii Aksenov,1932 -]、ヨ

シフ・ブロツキー [Iosif Brodskii, 1940 - 96] など)と、全部で 3 度にわたった。これは総体として見ると、ロシア(ソ連)国内の文学に対抗しうる重要なものであるだけでなく、世界的にも大きなインパクトを与えたが、従来のロシア文学史は 20 世紀を記述する際、地理的な本国ソ連をあくまでも中心とする一方で、亡命文学には十分な注意を払われなかった。そのため、亡命文学はいまだにロシア文学史の有機的な一部とはなっていない。

【言語と民族】言語と民族という視点からアプローチしても、ロシア文学の境界をはっきりと定めることを難しくする複雑な要素が介在していることがわかる。

まず、言語の面を見ると、ロシア文学の成立にとって決定的に重要な役割を果たしたのは、ギリシャの学僧キュロス(ロシア語表記キリル [Kiril, 826 - 69])とメトディオス(ロシア語表記メフォードイ [Mefbdii, 826 - 85])が 9 世紀後半にキリスト教宣教のために人工的に体系化したスラヴ文語、古代教会スラヴ語である。キエフ・ルーシの時代にロシアにブルガリアからもたらされた教会文献は基本的にこの言語で書かれており、それが東スラヴ的に変形されて中世ロシア語の基礎をなすにいたった。しかし、文章語としての古代教会スラヴ語と、土着語としてのロシア語の両方の要素を含むという意味でのロシア文学の言語の二重性は(その二つは言語的に互いに非常に近い関係にあるが)その後も長く引き継がれていった。ロシア文学における古代教会スラヴ語の位置は、日本文学における中国語(漢文)の位置にも比べることでよい。

ロシア語における教会スラヴ語的要素は、18 世紀以降のロシア語にも古風な文語的要素として強く残っていた。18 世紀中葉にミハイル・ロモノソフ(Mikhail Lomonosov, 1711 - 65)によって提唱された「三文体説」によれば、英雄詩や頌詩などのジャンルには教会スラヴ語的要素を活用した高位の文体が相応しいとされていた。口語からかけ離れたこういった古風な要素を排して近代的文章語としてのロシア語を確立していくプロセスは、18 世紀末のニコライ・カラムジン(Nikolai Karamzin, 1766 - 1826)による革新の試みを経て、19 世紀初頭アレクサンドル・プーシキン(Aleksandr Pushkin, 1799 - 1837)によってほぼ確立された。プーシキンの文学作品のロシア語はすでに現代のロシア語と実質的にはあまり変わりがなく、その後のロシア文章語の変化は日本の同期間の変化と比べると驚くほど小さい。

ただし、ロシア文学の言語としては、じつはロシア語以外にも考慮に入れなければならないものがある。18 世紀以降になると、教養あるロシア貴族の間では西欧語(主としてフランス語とドイツ語)の知識が必須のものとなり、日常会話や手紙などのためにフランス語を用いることも稀ではなかった。実際、プーシキンの手紙の多くはフランス語で

書かれているし、トルストイの『戦争と平和』(Voinaimir, 1869)は貴族のサロンにおけるロシア人のフランス語による会話で幕を開ける。一般にはあまり意識されないことだが、19 世紀初頭から半ばにかけてのロシア文学の担い手たちの社会環境は事実上、ロシア語とフランス語のバイリンガルなものだったのである。

また 18 - 19 世紀以降、ロシアは周辺の諸民族を併合して多民族的な帝国としての性格を強めていっただけに、ロシア文学の担い手たちも多民族的になっていた。近代ロシア文学最大の国民的詩人であるプーシキンの父方の祖父はエチオピアの黒人だったし、ニコライ・ゴーゴリ(Nikolai Gogol', 1809 - 52)はウクライナ人である。それ以外にも、外国の血を引くロシアの文学者は少なくない。20 世紀のソ連時代にもこの多民族的性格は基本的に引き継がれ、非ロシア人の少数民族出身の作家たちがロシア語に同化して、ロシア語で書くか、あるいは二ヶ国語併用者として活躍するようになった(たとえばキルギス人のチンギス・アイトマトフ [Chingiz Aitmatov, 1928 -]、アブハジア人のファジリ・イスカンデル [Fazil' Iskander, 1929 -]、グルジア人の父とアルメニア人の母を持つブラート・オクジャワ [Bulat Okudzhava, 1924 - 97]、チュヴァシ人のゲンナジー・アイギ [Gennadii Aigi, 1934 - 2006] など)。

【宗教】ロシア人の精神生活にとって決定的に重要な意味をもった出来事は、十世紀末にキエフ大公ヴラジミール(Vladimir I, 在位 980 頃 - 1015)によってキリスト教(東方正教)がビザンチンから採り入れられたことである。これ以後、ロシア文学もロシア正教の直接間接の影響下に一貫してあったと言えるだろう。古典ギリシャの流れを汲むロシア正教は、美と善の調和といった精神的理想の次元から、ロシア文章語の基礎として東方正教の典礼の言葉としてもたらされた古代教会スラヴ語の影響といった言語の次元、そして厳しい齋戒を食生活において課するという日常生活の次元にいたるまで、ロシア人の生活に強い影響を与えてきた。

ドストエフスキーやトルストイのような 19 世紀を代表する小説家の場合も、宗教との関わりを抜きにその文学の本質を理解することは難しい。西欧の文学が世俗化を通じて近代小説を発展させてきたのと対照的に、近代ロシア文学はむしろ宗教の提起する問題に積極的に取り組むことを通じて発展したという側面を持つ(もちろん、同じ土壌から宗教に反逆する革命的知識人たちも輩出し、それが結局、ロシア革命につながっていったわけだが、宗教的基盤の強さがそれに対する反動を激しくさせたとも考えられるだろう)。

20 世紀のソ連時代には、マルクス主義の立場から科学的無神論が公式的建前となったが、ロシアの長い歴史の中ではそれも一時的なエピソードに過ぎない。近代ロシアがド

イツのように体系的な哲学を生み出さず、そのかわりに文学と隣接した領域で独自の宗教哲学を発展させたのも、極めてロシア的な現象といえるだろう(19 世紀から 20 世紀にかけての広い意味での宗教哲学者としては、ニコライ・フョードロフ〔Nikolai Fedorov, 1828 - 1903〕、ヴラジミール・ソロヴィヨフ〔Vladimir Solov'ev, 1853 - 1900〕、ニコライ・ベルジャエフ〔Nikolai Berdyaev, 1874 - 1948〕などがある)。

多くのロシア人にとってロシア正教は、狭い意味の信仰にとどまらず、文化的・精神的なよりどころであり、西欧のカトリック世界と一線を画すロシア人のアイデンティティの根幹に関わるものであった。そのため、しばしばロシア正教の信仰はロシアの民族主義的な心情と結びつき、カトリック教はロシアとは異質な原理に基づくものとして拒否される傾向が強かった。ドストエフスキーは『白痴』(Idiot, 1868)の主人公ムィシュキン公爵に、「カトリックは無神論よりも悪い」とまで言わせている。その一方で、既存の教会権威を正面から批判し、正教会から破門された作家トルストイや、エキュメニズム的な立場から諸教会の融和を大胆に構想した哲学者ソロヴィヨフのような例があることも忘れてはならないが、象徴派詩人ヴァチスラフ・イヴァノフ(Vyatslav Ivanov, 1866 - 1949)のようにイタリアに移住し、ついにカトリック教に帰依するといったケースはロシア人の中では極めて稀である。

【政治・社会との関わり】ロシアの歴史を振り返ってみると、激しい社会的変動が文学に直接大きな影響を与えてきたことがわかる。10 世紀末のキリスト教受容、18 世紀初頭のピョートル大帝(Petr I, 在位 1682 - 1725)による近代化、19 世紀初頭ナポレオン戦争以後の民族意識の覚醒、1917 年のロシア革命、1985 年に始まったペレストロイカなど、いずれの事件も、ロシア文学史に新たな段階を切り拓く事件となった。西欧近代の文学者や文学研究者が、文学を社会的要因や政治権力から独立した自律的な精神活動と考える傾向が強いのに対して、ロシアの場合、文学はむしろ社会問題に関与することを通じて独自の発展を遂げてきたという側面が強い(そういう傾向に対する反動として、芸術至上主義的な立場をとった文学者ももちろん少なくないが)。特に 19 世紀のリアリズム小説は、同時代のロシア社会の様々な問題を「批判的」に取り上げるものが多く、文学者が「社会の教師」と呼ばれる素地を作った。

この現象の社会的背景としては、19 世紀以降、帝政ロシアの言論が厳しい検閲の下に置かれたため、政治的思想や社会的批評を直接論文の形で発表する道が事実上閉ざされていたということが挙げられる。そこで思想表現の柔軟な器として機能したのが文学であり、詩人や作家はしばしば「人心の支配者」と呼ばれるほど、社会に対する大きな精神的影響力を持つようになった。こういった事情は、引

き続き厳しい検閲制度が保持された 20 世紀のソ連時代にも変わらなかった。ソ連時代に作家が権力からしばしば厳しく迫害されたのも、文学の持つ影響力の大きさゆえのことである。

ただし、長いロシア文学の歴史を全体として見た場合、文学が権力に対して批判的で自由な個人の営みであった時期は比較的短いということにも留意すべきだろう。中世以来、18 世紀に至るまで、文学は教会や国家と緊密に結びつき、国家的目的に奉仕する使命を持つ場合が多かった。19 世紀文学の批判的精神は現在にまで受け継がれているものの、20 世紀のかんりの部分を占める社会主義時代は、国家的目的に結びついた文学の時代だった。

【東と西の間で】ロシア文学に複雑な陰影を与えている要因の一つは、ロシアの置かれた位置そのものの特殊性である。ロシアは西欧から見た場合、ヨーロッパの東の辺境に位置しているものの、ロシアよりさらに東に広がる非キリスト教世界に対しては、むしろ西側キリスト教世界を守るとりでの役割を果たしてきた。辺境にあるからキリスト教意識が弱まるということはなく、むしろその逆だったのである。これはロシアの文学者にとって、自己のアイデンティティの問題でもあった。18 世紀以降のロシアの貴族や知識人の間では西欧志向が強く、ロシアは多くの文物や知識をフランスやドイツから輸入してきたが、その反面、ロシアはそれ自体が多民族的な小宇宙であって、自らの中に非ヨーロッパ的な東方性を内包していた。中世ロシア文学最大の古典とされる叙事詩『イーゴリ軍記』(Slovo o polku Igoreve, 12 世紀末成立)にしても、その言語や世界観にチュルク系遊牧民が想像以上に強い影響を与えているという指摘もあり、ロシア文学やロシア文化の成立にあたっては、様々な東方の民族との接触の影響を過小評価してはならないだろう。

そのため東と西の間に引き裂かれ、自分はどこまでヨーロッパ人なのか、またヨーロッパと異なるロシアの独自性があるとすればそれは何か、という問いが、思想家や文学者たちによって繰り返し提起されてきた。19 世紀初頭の西欧派とスラヴ派の論争もまさにこの問題をめぐっての議論であつたし、その後、トゥルゲーネフ、ドストエフスキー、アンドレイ・ベールイ(Andrei Belyi, 1880 - 1934)、アレクサンドル・ブローク(Aleksandr Blok, 1880 - 1922)、ソルジェニーツィンなども本質的に同じ問題に対して各人各様の回答を試みてきたと言えるだろう。この問題は 20 世紀末、ペレストロイカ以降の現代ロシアにも引き継がれ、西欧的志向を持つリベラルな作家たちと、ロシア民族固有の価値を重んずる民族派(ソルジェニーツィンやいわゆる「農村派」の作家たち)の思想的対立はいまなお続いている。

ロシア語に魅せられて

ロシア語劇団「コンツェルト」・墨田まい

東京でユニークなロシア語演劇活動をしている学生集団「コンツェルト」。JIC はコンツェルトの公演に広告出稿等で協力していますが、今回、隅田さんに、コンツェルトの活動を紹介していただきました。ロシア語に魅せられた若い魂の鼓動が生き生きと伝わってくるようです(編集部)。

コンツェルトとは

1971 年、東京大学と早稲田大学でロシア語を教えていた野村タチアナ先生とその教え子により、劇団コンツェルトは設立されました。寸劇や詩の朗読、合唱など、ロシア語を通じた交流を目的とする「学芸会＝コンツェルト」として始まり、次第に本格的な戯曲へ挑戦するようになりました。創立当時の所属メンバーには、現在日本のロシア研究の第一人者である先生方も多くいらっしゃいます。

1999 年からはベラルーシの演出家ナターリア・イヴァーノヴァ氏に本格的な発音、演技の指導を受け、近年では『罪と罰』(ドストエフスキー)、『検察官』(ゴーゴリ)、『三人姉妹』(チェーホフ)、『巨匠とマルガリータ』(ブルガーコフ)などを上演しています。昨年 2014 年度は A.ヴァムピーロフ『鴨猟』を上演いたしました。

現在は早稲田大学と東京外国語大学を拠点に、東京大学、学習院女子大学からもロシア語を学ぶ学生が集まって、年数回の定期公演を続けています。ロシア語を専攻する学生のみならず、理系の学生や第二外国語が他の言語の学生、高校時代にロシア留学をしていた学生なども所属しており、バラエティに富んだ「ロシア語」劇団に成長いたしました。

この春休み中には、新歓公演『結婚申し込み』(チェーホフ)に向けての稽古をしています。新歓公演は 4 月中旬に東京外国語大学と早稲田大学で行う予定です。一般公開していますので、是非お越しください。詳細はコンツェルトホームページ(<http://theatrekontsert.wix.com/russia>)をご覧ください。

『はっこい』に誘われて(早稲田大学 2 年 西川裕起)

大学受験を控えた 12 月、受験勉強に疲れた私は気分転換にふと本棚にあった小さな本をとりました。これならば読み切るのに時間もかからないだろうという軽い気持ちで読み始めたのですが、これが非常に面白く、熱中してその日のうちに読み切ってしまいました。それはツルゲーネフの『はっこい』でした。これがきっかけとなって私はロシア文学に興味を持つようになり、早稲田大学に入学が決まってからも第二



↑2014 年度本公演『鴨猟』の様子

外国語はロシア語を選択しました。そして、入学一か月も経たないある日、まだキリル文字を覚えたかどうかというくらいの私の前に、コンツェルトの方々が授業宣伝にやってきたのです。衝撃的でした。演劇サークルと言っても様々な団体がありますが、ロシア語で演劇をしているというサークルに出会うのは初めてだったからです。さらには、劇団員の方がロシア語クラスの生徒の前で、『ロミオとジュリエット』のセリフをロシア語で暗唱されたのです。その発音のきれいなこと、きれいなこと。私はすっかり仰天してしまって、内心オロオロしていたのですが、そこで配られたビラがとどめを刺しました。

—2014 年度コンツェルト新歓公演ツルゲーネフはっこい—

まさかこんな形で『はっこい』と再会するとは思っておらず、これは是非とも観に行かねばと、実際に観劇したところ、そのクオリティにもびっくり。あらゆる点で斜め上を行くサークルだ・・・と感じて、私も入団させていただいた次第というわけです。



←2013 年度本公演『タレルキンの死』で演じる西川君(右)

憧れの先輩(東京外国語大学 2 年 笹原秋)

僕がこのロシア語劇団コンツェルトに興味を持ったのは、決してロシア演劇やロシア語をやりたいからではありません。当時、コンツェルトにはハーフでとてもきれいな先輩がいたのですが、その先輩にたまたま声をかけられ、何も考えずに「はい!」と答えて、ワークショップに参加したのがきっかけでした(笑)。こんな下心満載な僕でしたが、ワークショップに参加して、コンツェルトの先輩方の演劇に対する情熱や指導する先生のあまりの熱意に圧倒され、「ロシア語で演劇をやる」ということはこれほどエネルギーや情熱を持つ

てないといけないのかと体で感じたことは今でも覚えています。

極めつけは、これもある先輩が授業にサークル宣伝に来た時です。こんなことやってますよと「巨匠とマルガリータ」の中の台詞をワンフレーズだけしゃべったのですが、意味は全く分からないはずなのに、台詞の第一音が発音された瞬間から、教室の空気が一瞬にして変わり、その人物の気持ち、劇の情景が浮かんできたのです。めちゃくちゃカッコ



↑2013 年度本公演『タレクインの死』主役の笹原君

本公演『鴨獺』で主役を演じて...(東京大学 1 年 酒井優樹)

練習が 2 ヶ月間という短い準備期間でしたが、主役を演じてかけがえのない経験をすることが出来ました。演劇は初めての経験で、ロシア語の台詞を発音するだけでも大変でした。舞台に関して何も分からず、覚えの悪い私に、発音、演技指導の先生、演出、OB、OG、先輩たちは妥協を許さず、忍耐強く、そして優しく指導してくださいました。皆さんの支えで公演は満足のいくものになり、私は役者としても、そして人間的にも成長出来ました。

コンツェルトという劇団は小規模で未経験者も多いため、公演の稽古中にもトラブルがよく起こります。しかし、そんな時は気付いた人が自ら動き、それぞれの長所を持ち寄ってフォローしながら解決していく。それができるのがコンツェルトです。ロシア語の発音、演技指導をしてくださるナターリア先生は、よく「創造的な輪を作りましょう」とおっしゃいます。劇は一人では作れません。主体的に動き、力を出し合い、助け合い、エネルギーを集めて一つの劇を作っていく必要があります。私も納得のいく演技が出来ない、精神的に辛いなど多くの困難がありましたが、周りの人がいつも支えになってくれました。

今回主役を演じ、そういったコンツェルトの良さを体験することが出来ました。私はこの劇団がいつまでも続くことを願っています。「コンツェルトよ、永遠なれ！！」

いいなと思いました！自分は今もともと目立つのが好きという性格も手伝って、ロシア演劇は僕にとって未知な世界でしたが、迷わず入団しました。

入団した後も、先輩方や先生の熱血指導のもと、ロシア演劇の素晴らしさに触れ、ますますロシア演劇にはまっています。また今後は自分なりのカッコいいロシア演劇を創りたいです。



↑2014 年度本公演『鴨獺』主役の酒井君(右)

~~~~~

## ウラジオストク経済サービス大学

## 超短期ロシア語研修レポート

野口 武志 (JIC 大阪ロシア語講座受講生)

私は JIC 大阪のロシア語中級コースに通っています。昨年 9 月に 1 週間と超短期間ですが、ウラジオストクでロシア語留学を体験してきましたので、そのお話をさせていただきます。

ロシア語を学び始めて 12 年が経過し、悪戦苦闘を繰り返しながら、何とか文法的には中級の前半レベルまで到達しました。しかしながら、ロシア語講座以外で話す機会がなく、会話は正直言ってどれくらいのレベルかなと疑問を抱き、昨年のソチ・オリンピックの開催がきっかけで、ダメ元でチャレンジしようと決意しました。グループレッスンも考えたのですが、他の留学生に迷惑にならないようにと最終的に選んだのは、ウラジオストク経済サービス大学でのマンツーマンレッスンでした。宿泊はロシアの一般家庭でのホームステイです。ロシアの人達がどんな暮らしをしているのか全く想像もつかない状況で、その環境にとりあえず飛び込む勢いで出発しました。

出迎えてくれたホストファミリーは、共働き夫妻と 5 歳の息子さんの 3 人家族の家庭でした。大学に通っている間は夫婦とも留守なので、スペアキーを持たせてもらい、月曜日から金曜日まで大学に通いました。大学まで徒歩 15 分で、アクセスのとても良い環境でした。朝食と夕食はホストファミリーと一緒に食べ、昼食は大学構内のカフェテリアで済ませました。ホストファミリーが帰宅するのが夕方 6 時半から 7 時ぐらいで、その間、大学の先生から出された宿題を済ませ、帰宅後はやんちゃな息子さんを相手にゲームをしたり、夕食時はウォッカを飲んで、ブローケン・ロシア語でご主人と奥



さんと会話をしました。完全に通じた訳ではありませんが、楽しかったです。

大学の授業では、最初の月曜日に大学でテキストを購入 (600 ルーブルぐらい)。レベルは初級のもので、1 冊 190 ページぐらいあります。授業のスケジュールは 1 日 2 レッスン。1 レッスン 90 分で、文法、リーディング、会話の授業で構成されています。レッスン中に先生がテキストでこの辺のレベルは理解していると判断するとスキップしてくれます。

滞在期間中は、いろいろなことありました。ホスト宅のトイレトペーパーがなくなり、ティッシュペーパーで代用していた日の翌日に、大学構内でトイレトペーパーとウォッカを購入しましたが、ご主人もトイレトペーパーをスーパーで買って帰ってきて、トイレに私が買ったトイレトペーパーを見つけて、「私も買って来たよ。同じ事を考えてたね。」とにっこりしながら言いました。その日は距離感がぐっと縮まった感じで、またウォッカを飲みました。



大学の先生たちと

そうして、あっという間に 8 日目の土曜日がやって来ました。やっぱり、ホストファミリーや大学の先生、学生たちと楽しく過ごさせてさしてもらったことを、単なる旅行体験で終わらせたくないと思いながら帰国しました。またいつか行けるように、ロシア語会話力をアップさせていけたらと思いながら、ロシア語講座を継続しています。JIC のスタッフの皆さん、この短期留学ではいろいろお世話になり、ありがとうございました。

#### 研修後のアンケートから;

以下は、短期研修の後に野口さんからいただいたアンケートの回答です。こちらも参考になります。

問: 1 週間の短い研修でロシア語が理解できるようになった実感はありましたでしょうか?

答: まず、実際に Native Russian の話す速度がかなり早く、そういう面では、初級程度の会話においては、聞き取り能力は良くなりました。ホームステイがある意味で腕試しの機会があったからこそだと思います。

学生寮で学ぶという選択肢もありますが、逆に、同じ出身国同士で過ごしがちになり、同郷同士で仲良くてもいいかもしれませんが、ロシア人と話す環境を作る、もしくは自分からロシア人の学生に話しかける心が必要だと感じました。でも、アツという間に 1 週間。...これは短い。だからこそ、僕より先に来ていた方が 2 回、3 回と同じ大学に来られるというのがよく理解出来ます。

問: 昼食はどんなものを食べていましたか?

答: 大学内のカフェテリアは 3 箇所ありました。ボルシチ、ウハー、ポテトサラダ、ライス(スペイン料理のパエリアの具を全て除いた黄色いご飯)、ピラフの味を薄くしたご飯、ロールキャベツ(これが一番美味しいけど、すぐになくなります)、ストロガノフ、カーシャ、キシユカ、ペリニエ、などなど。

追記: 大学構内にイベントホールがあり、以前、ファッションショーが行われたそうです。他にも、肉、野菜、魚介類、ビール、ウォッカ、お菓子類、...といったスーパー顔負けの食料品店、美容室、土産物屋、楽器店、文具店、メガネショップ、化粧品や日用雑貨などのショップがあり、とても大学とは思えない感じで、こんなにオシャレな大学とは思いませんでした。全部伝え切れないですが、参考にしてください。

## ロシア文化フェスティバル 2015 IN JAPAN

スタニスラフスキー & ネミロヴィチ=ダンチェンコ記念

## 国立モスクワ音楽劇場バレエ

芸術監督: イーゴリ・ゼレンスキー

管弦楽: 国立モスクワ音楽劇場管弦楽団

日程: 5 月 20 日 ~ 24 日

会場: 東京文化会館 大ホール

演目: ブルメイステル版『白鳥の湖』(全 4 幕)

ブルメイステル版『エスメラルダ』(全 3 幕)

主催: キョードー東京 ☎ 0570-550-799

\* 初日の 5 月 20 日には、日ロ文化フェスティバルのオープニングセレモニーが同時に行われます。

## 日露修好 160 周年記念展

日露国交が開かれた下田条約から 160 年。幕末期の日ロ交流と歴史資料を展示します。

日程: 5 月 14 日 ~ 23 日

会場: 東京都文京区・鳩山会館

主催: ロシア文化フェスティバル日本組織委員会

TEL: 03-5919-1051

## ロシア文化フェスティバル 2015 IN JAPAN

\* 今年も多彩なプログラムが予定されています。

ウラジーミル・ブードニコフ(ピアノ)&谷本潤(バイオリン)

日露音楽家交流 10 周年コンサート

5 月 2 日 14 時/17 時 30 分 音楽の友ホール

5 月 3 日 18 時 六本木シンフォニーサロン

ドミトリー・シシキン ピアノリサイタル

日程: 5 月 21 日~6 月 2 日

場所: 埼玉、岩手、静岡、埼玉、東京

ウラジーミル・フェドセーエフ指揮

モスクワ交響放送楽団コンサート

5 月 28 日/5 月 30 日

東京・サントリーホール

ヴァレリー・ポリャンスキー指揮

ロシア国立交響楽団コンサート

7 月 9 日 東京・サントリーホール

7 月 10 日 静岡・アクティシティ浜松

7 月 11 日 兵庫・神戸文化ホール

7 月 12 日 神奈川・横浜みなとみらいホール

7 月 13 日 東京・武蔵野市民文化会館

7 月 17 日 新潟・リゅーとぴあ新潟市民文化会館

7 月 18 日 東京・東京芸術劇場

7 月 19 日 愛知・愛知県立芸術劇場

7 月 20 日 大阪・大阪シンフォニーホール

7 月 24 日 福岡・アクロス福岡

7 月 25 日 広島・三原市民芸術センター・ポポロ

7 月 26 日 宮城・東北大学萩ホール

7 月 28 日 岩手・盛岡市民文化ホール

ポリショイサーカス公演

7 月 18 日~26 日 東京・東京体育館

7 月 29 日~8 月 5 日 神奈川・横浜文化体育館

8 月 8 日~11 日 千葉・幕張メッセ・イベントホール

8 月 14 日~17 日 福岡・福岡国際センター

8 月 21 日~24 日 大阪・ポディメーカーコロシアム

8 月 27 日~31 日 愛知・愛知県体育館

その他、レニングラード国立舞台サーカス(7 月 24 日~8 月 12 日)、ロシアン・ピアノスクール in 東京(8 月 8 日~15 日)、ミハイロフスキー劇場ガラ・コンサート(8 月)、サハリン人形劇団公演(9 月)、ブリヤート自治共和国「ナムガル」コンサート(10 月)、ロシア国立モスクワアカデミー合唱団(11 月)、国立サンクトペテルブルグアカデミーバレエ(12 月)など。  
→ 詳細は、文化フェスティバル日本組織委員会にお問合わせください(☎ 03-5919-1051)



## ◆◆編集後記◆◆

▼ロシア文学の魅力を縦横に語っていただいた沼野充義先生の講演は、ロシアに関わる私たちにとって、ロシアという国を知る上で、さまざまなヒントを与えてくれています。同時に、「精神の豊かさ」ということについて、深く考えさせられました。▼今年は例年になく早く桜の花が開花しました。4 月は新しいスタートの季節。JIC のロシア語講座も東京と大阪で新規開講します。今年も何か一つ、新しいことに挑戦してみませんか。▼桜シーズンから 5 月にかけてはロシア人観光客の受け入れのピーク。それが過ぎると、次は夏の旅行シーズンが到来します。忙しい中にもちょっとした楽しみを見つけて、心の余裕を失わないようにやっていきたいものです。(F)

## \* \* JIC のロシア語留学・研修 \* \*

26 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 26 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 3,000 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様のバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

## ロシア語長期留学 4 月生・募集中



締切間近です  
今すぐお申し込みを!

期間: 2015 年 9 月 1 日より 10 ヶ月  
締切: 2015 年 6 月 12 日(金)

モスクワ国立大学 763,000 円(授業料 10 ヶ月)

サンクト・ペテルブルグ国立大学 837,000 円(授業料 10 ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 388,000 円(授業料 10 ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかります。

◆JIC ロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。  
お気軽にお越しください。

東京事務所 平日 9:30-18:00 03-3355-7294

大阪デスク 平日 9:30-16:00 06-6944-2341

※留学相談は、必ず事前に予約してお越しください